

「天狗草紙」の復元的考察 — 称名寺鈿阿筆「天狗草紙詞書写本」を手がかりに —

千葉大学 土屋 貴裕

全七巻よりなる「天狗草紙」は、詞書に記される年紀から永仁四年(1296)に成立したと考えられる鎌倉時代後期の絵巻である。現在この七巻は諸家諸機関に分蔵されているが、本来は一具のものとして制作されたと考えられる。従来の研究において、本絵巻には先行する祖本の存在が指摘されるほか、詞書に記される本絵巻全体の構成と現存する巻との間での齟齬に関して様々な説が提出されてきた。

これらの問題を再検討する上で、称名寺蔵神奈川県立金沢文庫寄託聖教中において見出され、仏教史や国文学の分野で注目を集める「天狗草紙詞書写本」(内題「七天狗絵」)は、美術史研究上重要な資料であると言える。この写本は、称名寺二代目長老鈿阿の筆で、絵画表現を伴わない詞のみの資料とは言え、現存絵巻と全体の構成をほぼ同じくする唯一の資料として注目される。また、本資料によって現存絵巻では散逸してしまった巻・段の存在も確認でき、制作当初の全体の構想も明らかとなる。しかしながら、現存絵巻詞書と鈿阿写本(以下、鈿阿本)の本文の間には、若干ではあるが重要な異同が確認でき、また、鈿阿本には現存絵巻とは内容の異なる「画中詞」の記述も散見できる。これらのことから、鈿阿本の祖本は、現存絵巻とは内容を若干異にする別の絵巻であったと推測される。それゆえ、鎌倉時代後期に存在した二つの「天狗草紙」、すなわち鈿阿本の祖本と現存絵巻との関係を考察することは重要な課題となる。本発表では、新たな関連資料である鈿阿本を手がかりとして祖本の復元的考察を行い、現存「天狗草紙」の性格及びその制作背景を解明する上での基礎的な視座を提示する。

はじめに、現存絵巻・鈿阿本及び部分的に内容の重なる「魔仏一如絵」・「探幽縮図」の絵と詞の系統を整理する。その上で鈿阿本の祖本が現存絵巻に先行して制作され、かつ現存絵巻の祖本に相当する絵巻であったことを明らかにする。

次いで、現存絵巻と鈿阿本双方に共通する祖本の存在を前提に、祖本成立の環境を検討する。この点でとりわけ注目したいのが、『塵添_囊鈔』において「七天狗絵」の作者とされる「寂仙上人遍融」である。遍融はいくつかの血脈類にその名が見られ、真言律宗西大寺流の東山太子堂と関わる東密系学僧であったことが確認できる。遍融周辺には南都とも連なる「諸宗兼学」の僧も多く、祖本成立の思想的基盤をうかがい知ることができる。

現存「天狗草紙」は、その祖本である絵巻とは異なる表現を意識的に目指しながらも、全体の構想及び思想的背景は継承していると考えられる。とりわけ注目したいのは両本の最終段に主張される「諸宗和合」の思想である。従来の研究で本絵巻は、ある特定宗派の宗教的優位性を主張する絵巻として捉えられてきた。しかしながら、本絵巻の真の主張は、鎌倉期の「仏法」のあり方を「諸宗和合」によって捉え直すことにこそ求められることを提示したい。